「大変だ、彼が川へ落ちた！」
　キャサリン・アデア――友人や最愛の家族からはキャットと呼ばれている――は息をのんでぱっと立ちあがった。つい先ほどまで彼女は〈ザ・プロミス〉などという嘆かわしいほど不似合いな名前を持つ父親の船の甲板に座って、本を読んだり夢想にふけったりしていた。幼いころから日曜日をよく父や姉とテムズ川の船上で過ごしてきたが、その日もそうだった。目の前をしばしば上流階級の人々を乗せた目を見張るような船が通っていく。キャットは姉のエリザベス――イライザが上流階級の気どった言葉づかいをまねるのを笑いながら聞いたあと、一緒になって古い舟歌を口ずさみ、父親が近くにいないことを確かめてから、きわどい歌詞をふたつ三つつけ加えた。
　しかし、もちろんなにもしないでただ夢想にふけっているときもあった……夢想の対象はもっぱら、たった今すばらしいレジャー用ヨット〈ジ・インナー・サンクタム〉の甲板から波にさらわれた人物その人だ。
　デーヴィッド。デーヴィッド・ターンベリー、ロスチャイルド・ターンベリー男爵の末息子、将来を嘱望されているオックスフォード大学の学生、ヨット遊びが大好きな冒険家。
「キャット、座りなさい！　そんなふうに立っていたらこのおんぼろ船が揺れて、わたしたちまで川へ落ちてしまうじゃないの」イライザがしかった。「心配ないわ。オックスフォードの学生が大勢いるんだもの。だれかが助けてあげるでしょ」彼女はふふんと鼻を鳴らして言った。
　だが、だれも助けようとしなかった。その日のテムズ川は危険な状態で、そうした大荒れの風景描写を得意としているキャットの父親にはよくても、ヨット遊びには最悪の天候だった。デーヴィッドと一緒にヨット遊びに来た若者たちは索具にしがみついて、水中をのぞきこみながらわめいている。しかし、川へ飛びこんで助けようとする者はいない。キャットは知っている人物の姿を認めた。ロバート・スチュアート。土地持ちで魅力あるハンサムな学生で、デーヴィッドの親友。なぜ彼は水中へ飛びこまないのだろう。それにほかにもデーヴィッドの友達がいる。なんという名前だったかしら。アラン……なんとか。
　ああ、ばかな人たち！　救命具を投げてやろうとさえしないなんて。デーヴィッドのいる場所はキャットたちの船から遠いので、こちらから救命具を投げてやっても役には立たないだろう。
　こんな日に彼らはヨット遊びに来るべきではなかったのだ。まだ若くて未熟なくせに、自分たちは操船技術に長けているとうぬぼれていたのだろう。こんな大荒れのテムズ川へ乗りだしてくるのは、漁師か愚かな人間しかいない。それとわたしの父くらいなものだ、とキャットは沈んだ気持ちで思った。
　しかし、今彼らの目の前でデーヴィッドが溺れようとしている！　それなのに大切な友人を助けようと川へ飛びこむ勇気のある者がひとりもいないとは。

たしかにこれほどの荒波を前にしたら、恐怖を覚えるのも無理はない。それは理解できるものの、キャットの胸は張り裂けそうだった。デーヴィッドは美しく立派な人物だ。あのような笑顔の持ち主はイングランドじゅう、いや、世界じゅうどこを探してもいない。それればかりか、彼のような高い身分に生まれながら、漁でなんとか生計を立てている貧しい人々にあれほどやさしく話しかける人を、キャットはほかにひとりも知らなかった。彼女はそれほどしばしば彼を見かけた。

「だれひとりデーヴィッドを助けようとしないわ！」キャットは叫んだ。

「助けるわよ」

「でも、ぐずぐずしていたら溺れてしまう！」キャットは急いで周囲を見まわした。彼女たちの船の帆はすでに父親がとりこんでしまったので、今や船は波のなすがままだった。

実際のところ、父は仕事をしてもいなければ、キャットに注意を払ってもいなかった。今日はレディ・ドーズが一緒に来ていて、けたたましい笑い声をあげどおしだったのだ。まるで海の魔女みたいなその笑い声がキャットは大嫌いだったけれど、父は少しも不快に感じないどころか、彼をものにしようとたくらんでいるレディ・ドーズにすっかり夢中のようだった。

キャットは心配でたまらず、川へ視線を戻した。とても長い時間がたったように思われたが、わずか数秒間だったに違いない。船上の若者たちが勇気を奮い起こすには、少し時間が必要なのだろう。いや、違う。時間は刻々と過ぎていくのに、豪華なヨットに乗っている若者たちのだれひとりとして友人を助けるそぶりを見せなかった。

「キャット、そんなにうろたえないで。さあ、こっちへ来なさい。きっとデーヴィッドは泳げるのよ。最近は貧しい人々も列車で国内の海辺へ出かけられるようになったとはいえ、いまだに海辺は彼みたいなお金持ちの海水浴客でいっぱいだもの。もちろん上流階級の人たちは地中海で遊ぶのが好みらしいけど」

イライザはさも軽蔑(けいべつ)したように裕福な人々の話をするが、一日の舟遊びをほぼ終えて午後も終わろうとしているこの時間帯になると、『ゴーディーズ・レディズ・ブック』を読みふけるのが習慣になっている。姉はファッション感覚が鋭く、針仕事が好きで、捨てられた帆やキャンバス地などの布からでも見事なデザインの服を縫いあげることができた。

キャットはイライザの言葉をほとんど聞いていなかった。まるで心臓が喉までせりあがってきて、そこにつかえたかのようだ。さっきまで波間に見え隠れしていたデーヴィッドの頭さえ見えなくなった。

ああ、あそこ！　彼の優美なヨットからあんなに離れてしまっている。

「なんてひどい荒れ方かしら」キャットは感情のこもった声でささやいた。「あの人、死んでしまうわ」

「あなたにできることはなにもないわ。助けに行ったって自分が死ぬだけよ」イライザが

激しい口調で警告した。
「ええ、だけどデーヴィッドのためなら死んでもかまわない。彼を救えるなら魂を売ったっていいわ！」キャットは言い返した。
「キャット、いったいなにを……？」イライザがぎょっとして言いかけた。
遅すぎた。
ときとして貧しさにもそれなりの利点がある。キャットは頑丈で重たい実用的な靴を脱ぎ捨て、コットンのスカートを腰から滑らせて床へ落とした。そしておさがりの上着をすばやく脱いだ。外すべきコルセットや腰あて（バッスル）はつけていなかったし、お気に入りの小さな帽子もかぶっていなかったので、あっというまにシュミーズ姿になり、姉の制止を振りきって濁流へ飛びこんだ。
水の猛烈な冷たさが肌を刺す。
そのうえ荒波が容赦なく襲ってくる。
だが、キャットはこれまでの人生で海と慣れ親しんできた。肺いっぱいに空気を吸って水中にもぐり、懸命に泳ぐ。
最初に浮かびあがったのはヨットの近くだった。甲板で必死に叫んでいる若者たちの声が聞こえた。
「彼が見えるか？」
「頭が……また沈んでしまった。ああ、なんということだ！　このままでは溺れ死んでしまう。船の向きを変えろ、早く変えるんだ。デーヴィッドを見つけないと！」
「もうどこにも見えないぞ！」
キャットはもう一度大きく息を吸って再び水中にもぐった。つらいのをこらえて目を開け、濁った水を透かし見る。するとそこに……。
そこにデーヴィッドが見えた。右手の二メートルほど下に。
死んでしまったの？
ああ、神様、そんなのだめ！　キャットは必死に祈りながら彼のところへ泳ぎ着こうとした。デーヴィッド。ハンサムですてきなデーヴィッド。その彼が目を閉じて……沈んでいく。
デーヴィッドをつかまえたキャットは、船から転落した漁師を助けるときの方法を父親から教わっていたことを思いだした。彼の顎の下に片方のてのひらをあてがって水面へ頭を引っ張りあげると、上半身と両脚と空いているほうの腕を懸命に動かして岸を目指した。
ああ、なんて遠いのだろう。
これではとうてい泳ぎ着けそうにない。
だが、豪華なヨットも父親の船もさっきよりいっそう遠ざかってしまったように見える。帆をあげているヨットや錨（いかり）をおろしているほかの船はもっと遠くにいるみたいだ。こう

なったら、なんとか自力で岸へ泳ぎ着くしかない。
気持ちを静めながら水を蹴っているうちに、キャットは荒波に逆らって体力を消耗してはならないことを思いだした。流れに乗ることで体力を温存し、荒波が岸のほうへ運んでいってくれるのに身を任せるのがいい。
キャットはデーヴィッドの頭が水中に沈まないよう努力し、必死に息継ぎをしながら濁流に負けまいと手足を動かした。白い波頭を立てている灰褐色の水は、まるで息づいている生き物のように彼女を水底へ引きずりこもうとする。とても細く見えることもあるテムズ川なのに、今日は……なんと川幅が広いことか。
それでいながら、凍えてもがいているさなかに、ふとひとつの思いがキャットの胸をよぎった……。
この人はわたしの腕のなかにいる。ああ、なんてことかしら！　この人はわたしの腕のなかで死ぬかもしれない。
わたしだったら、彼の腕のなかで喜んで死ぬだろうけれど。
「なんたることだ！　あの愚かな若い連中を見ろ」ハンター・マクドナルドはヨット上をばかみたいに走りまわっている若者たちをにらんだ。仲間のひとりが川へ落ちたというのに、彼らはうろうろするばかりでなにひとつ策を講じていない。

ハンターは若者たちを容赦なくののしってから、海の仲間で、従者であり友人でもあるイーサン・グレイソンに大声で呼びかけた。
「あの娘を連れ戻さないと。ぼくが若者を助けに行く」
「サー・ハンター！」経験豊かでたくましく、無謀な行為に走らないだけの分別を備えているイーサンが激しく抗議した。「こんな川へ飛びこんだら、あなたが溺れてしまいます」
「心配するな、溺れはしないさ」ハンターは急いで靴と上着とズボンを脱ぎ、イーサンに向かって顔をしかめた。「そうとも、ぼくは鰐のいるナイル川で泳いだこともあるんだ。それを思えば、この程度の流れはなんでもない」
それだけ言うと、ハンターは下着だけになって美しいフォームで水中に飛びこみ、浮き沈みしている若者の頭を最後に目撃した方角を目指して泳いでいった。後ろから憤慨してわめいているイーサンの声が追いかけてきた。「〝サー〟の称号は持っていても、分別はちっとも備えちゃいない。そう、これっぽっちも。せっかく飢えや戦争や邪悪な人間のたくらみをかいくぐって生きのびたのに、ばかな若者を助けようとして命を落としてしまうとは！」
もう遅い、とハンターは思った。彼をのみこもうとするテムズ川の荒波を切り裂き、力強い泳ぎで進んでいく。激しく手足を動かしていれば体が冷えずにすむ。
水は凍えるほど冷たい。

鰐のいるナイル川を泳ぐほうがまだ容易だった、とハンターは半ば後悔した。

（この続きは、ＭＩＲＡ文庫『砂漠に消えた人魚』でお楽しみください）